

フンザの口承文芸
——カラコルム辺境地帯の調査報告——

鈴木 道子

Research Note : Oral Literature in Hunza
A Report on the Ethnomusicological Scientific Research in
North Pakistan and Northwest India, 1980
Financially Supported by the Ministry of Education of Japan

Michiko Suzuki

I. はじめに

筆者は、1980年7月から9月にかけて、文部省科学研究費助成金による海外調査「北パキスタン・西北インド民族音楽学術調査」(研究代表者 藤井知昭国立民族学博物館教授)に、研究分担者として参加した。本稿は、その時の現地調査を軸にした、かつてのフンザ王国の口承文芸についての研究ノートである。

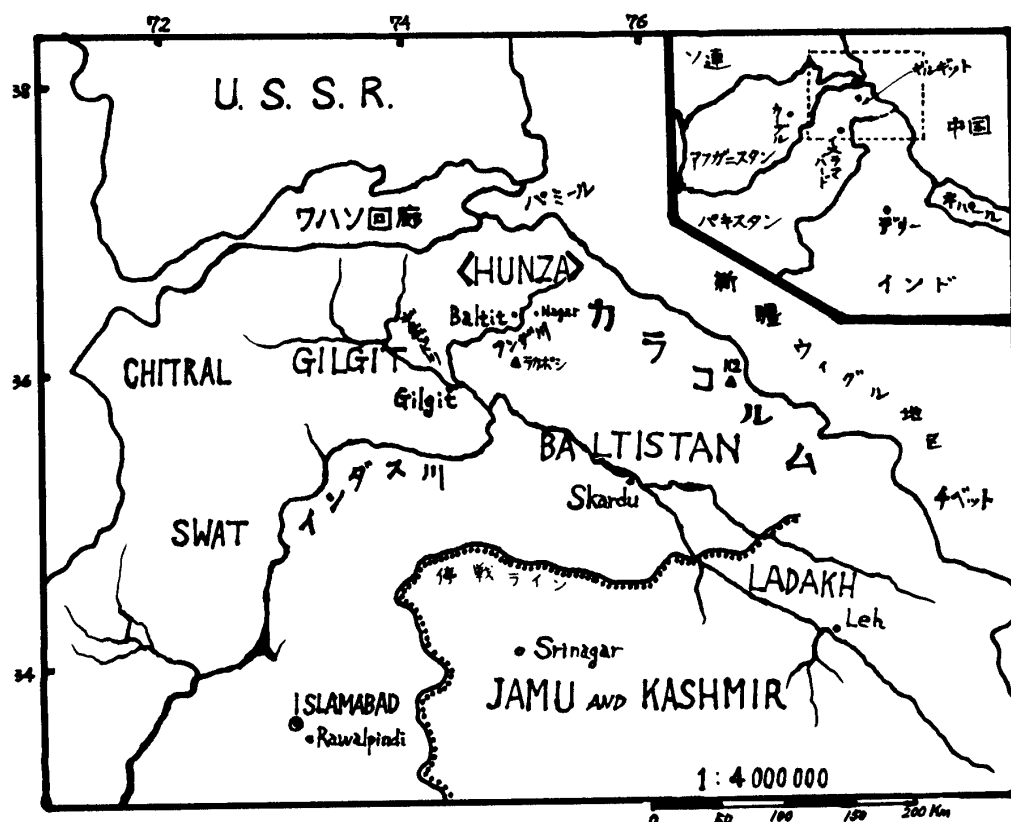
今回の調査対象とした地域は、1965年の印パ戦争の病根であったカシミール紛争により分割されたままになっている関係諸地域である。1947年以降、国連の仲裁により、旧インド領ジャム・カシミールに相当する領域は、一部がアーザード(自由)カシミールとしてパキスタンの保護下に、バルチスタンとギルギット管区はパキスタンの直轄領に、残りのカシミールおよびラダックとジャムがインド領内でジャム・カシミール州を形成している。この分割は、あくまでも暫定的停戦ラインによるものではあるが、行政の管轄は厳然と、インドおよびパキスタンに分かれており、日本の有力新聞・雑誌が今日でさえ、旧体制下の地図をしばしば掲載することがあるため、蛇足ではあるが、以上のことを付記する次第である。

調査隊が実際に調査した地域は、パキスタン領内の、ギルギット、フンザ、ナガール、バルチスタンと、インド領内のスリナガル周辺およびラダックのレー周辺である。

II. フンザの地理的・文化的背景

1. 地理的背景

フンザはナガールと共に、行政的にはギルギット管区に入る。ギルギットは、バルチスタンのスカルドゥと並んで、カラコルムの山々をめざす人々にとっては、物質文明の尽きるところであり、インド



の人間にとっては、今日もなお、「インドへの北の玄関⁽¹⁾」である。

1960年の6月、トインビーはギルギットを訪れ、『オクサスとジャムのあいだ』の中に、次のように記している。「…ヒンズークシ山脈は巨人である。しかし歴史がヒンズークシの防備を破って入ったその部分では、ギルギットを他から引きはなしている山脈の半分の高さしかないのである。この山脈は『世界』最高の山脈の中に数えられる。そしてこの山のお陰でギルギットは歴史をもたないという幸福を享受したのだ——歴史がないといっても、つい最近まで語るべきものがなかったということだが⁽²⁾。」

「歴史をもたない」という言い方は、コロンブスによる「新大陸の発見」という言い方と共通した、一面的な見解をいみじくも露呈してしまっているが、「歴史がない」ということは明らかに偽りであるにしても、その歴史に私達が接近することが困難であったということは真実と言えよう。トインビーも、この時、ギルギットからフンザに至る道を、ジープではほんの40マイルほど行き、ラカボシの山を眺めて帰って来たにすぎない。それも、崩れ落ちそうな道を冷や汗をかきながらの道程であったようである。20年後の今日では、フンザはギルギットからジープで3・4時間の距離となった。1979年になってようやく全面開通したカラコルムハイウェイは、首都イスラマバードの北187kmに位置するタコットから、フンザを通して中国との国境をなすフンジェラップ峠までを一直線に結び、北部辺境地域の生活を刻々と変えつつある。

道は全て、インダス川と共に走る。フンザを流れるフンザ川は、ギルギット川に注ぎ、ギルギット川は、インダス川に合流する。そこでインダス川は大きくカーブを描いて南へ溯上し、バルチスタン、

ラダックを通して、ヒマラヤの奥地に源を秘める。時には静止しているように、おおかたは怒濤となって流れるインダスの対岸に、带状に続く旧道を、現在のほぼ舗装も完成されつつある自動車道路から見る事ができる。そこを、転がり落ちそうになって通る人とヤクやロバが、かつてはこの地域一帯を結ぶ唯一の交通と情報の手段であったに違いない。部族間の戦闘などは、冬期に行なわれることも多かったようである。川が氷った方が移動が容易であるという。

2. 文化的背景

現在中国とパキスタンの間は、カラコルムハイウェイを経由して年に2回ほど、特定の政府関係者による通商が定期的に行なわれている。フンザの小さな雑貨屋にも、中国製のマッチ・タバコ・トイレットペーパーなどが山積みしてある。紀元5世紀初頭、北魏の僧法顕が、ガンダーラの仏法を求めて、^{ホータン}于闐を通り葱嶺（パミール）を越えてインドの地を踏んだのは、恐らくこの同じルートによるものと推定されている。

フンザは俗に、アレキサンダー軍の末裔による王国と言われ、コーカソイド系の体質を一般に見ることができるが、多民族の混血が進んでいることも明白である。乏しい歴史的資料が明らかにする限り、少なくともここに10世紀間は、フンザ川の対岸に位置するナガールと共に、独立王国を築いてきた。しかし、1974年に王制は廃止され、現在のミール（藩王）ガザンフェール・アリはパキスタン中央政府の統治下で地方行政の任務を委託された形となっている。

フンザが世界の近代史の流れと接触をもち始めたのは19世紀の末といえよう。戦闘的で、真偽のほどは定かでないが、山賊集団の異名をとった⁽³⁾フンザクト（フンザ人）たちは、カシミールの藩王マハーラージャやその行政機関のあるギルギットに敵意を示し、攻撃をしかけていたが、1870年になって、毎年フンザからマハーラージャに対し、「金12トゥラ（約144g）、馬2頭を差し出します、云々⁽⁴⁾」と約した書簡が残されている。当時の推定人口が6千人⁽⁵⁾、現在3万5千人位ではないかということである。

フンザの名を知る人々にとって長い間、そして今もなお、フンザは「不老長寿の国、桃源郷」としてみなされてきたが、1950年、アメリカの地理学者J. ラークが長期の滞在調査の末明らかにした現実⁽⁶⁾は、無視してはならないであろう。——赤ん坊の高死亡率、恒常的栄養失調、乏しい耕地や食料、厳しい自然環境、等々は、今も飛躍的に向上したとは言い難い。氷河に続く谷とフンザ川の交わる三角地帯に、わずかに広がる耕地や果樹園に依拠して生活しているのがフンザの村々である。ここ1・2年間の間に、ようやく電灯が日に3・4時間ともるようになった。画期的変化の一つであろう。しかし停電が頻発し、人々は昔ながらのランプのもとで夜を過ごし、桑の実やぶどうを自然発酵させた俗称「フンザワイン」を、他者の目をはばかりながらも飲み、歓談することを楽しみの一つとしている。調査隊が滞在した7・8月、人々は7788Mのラカボシ^{よせもの}の山頂に朝日が反射すると同時に起きて、農作業を開始していた。誠に清らかで雄々しい山々と、人々のシンプルな日常生活は、フンザの口承文芸を考える上で、重要な背景であると思われるのである。

III. 口承文芸を支える人々

1. 部族と言語

現在のフンザは、フンザ川右岸に沿って上流から、アパー・フンザ、ミドル・フンザ、ローア・フンザの3地区に分かれる。旧フンザ、即ちフンザ・プロパーは、ミドル・フンザにあるバルティート、アルティート、ガニシュの3部落を指し、ウルタルの氷河から流れ出る谷川を疎水として山の斜面に発達した地域である。

それぞれの地域の人口は正確には把握されていない。調査隊のインフォーマントを務めたサムサム・ムッラー・ベイグは、ミドル・フンザの人口を約1万6千人と推定した。ここで用いられている言葉は、ブルシャスキー語という、他との関連が一切認められていない独立言語で、文字をもたない。アパー・フンザに属する約20の部落では、人口の80%がワヒィ、即ちワヒィ語を話す人々とされている。バミリィ語の系統に属するワヒィ語の話者は、アフガニスタンのワハン回廊周辺から移動して来た者であると考えられている。ローア・フンザに行くと、シーナ語を話すシェーンと呼ばれる人々が圧倒的多数を占めるようになる。シーナ語は、パキスタンの公用語であるウルドゥ語に近い系統に属し、ギルギット地区の主要言語であり、ウルドゥ語と同じペルシア文字を用いる。言語とトライブの関係は、今のところ正確にはとらえ難いが、全フンザの中で、ブルシャスキー語を話すブルジョ族は約60%位とみることができよう。

ブルシャスキー語については、1920年から24年にかけて、ギルギットで英国政府の行政官を務めた、D.L.R. ロリマーの調査による、全3巻におよぶ大著があるが⁽⁷⁾、その後、この言語についての研究は、ほとんど何もなされていない。その第2巻で扱われているフンザの物語・歌・諺の音写と英語訳および言語的解説は、極めて貴重な資料であり、昨年現地で収集した資料とならんで、本稿を支えるものとなっている。

2. 口承文芸の伝承者

ロリマーは、フンザには^{プロ}ストーリーテラー部はないと再三述べている⁽⁸⁾。彼がテキストに用いていた物語のほとんどは、ワジール（貴族）である1人の男から直接採集されたものである。その他の情報提供者も、1人の老人を除き、ワジールである。但し、ロリマー自身も興味深いと言っていることであるが、採集した物語りの出だしの部分をアト・ランダムに、フンザの上流階級の人々に聞かせると、彼等は即座に後を続け、しかも、採集した時のテキストとほとんど同じように語ったという⁽⁹⁾。

今回調査隊が行なった調査で明らかにされたことは、プロフェッショナル（専門的）とは言えないかも知れないが、物語のスペシャリスト、即ち語り部は存在するという事実である。現在は数が激減しているが、それでもフンザ全体で15人位はいるであろう、ということであった。ブルシャスキー語でミナシング・クween（物語師）と呼ばれ、ほとんどの者が、20年位前まではミール（藩王）に直接召しかかえられていた。ミールもパキスタン中央政府の行政組織に組み込まれるようになった現在は、

農業などをするかたわら、冬期に有力者の家の人々が集まった折など、招じられて語っているという。短い物語で15分～20分、長いものは2時間余を要する。

ワヒィ語の物語や歌を聞かせるブルジョ族の語り部もいた。この者は、ミールに所属していた頃、しばしば北の国境線近く（ワヒィ語の有力な地域）まで狩の供をして行き、そこで現地の物語や歌を覚えたと言う。これは、物語の伝播を実証する具体的な好例と言えよう。

シーナ語文化圏に属するロアー・フンザのヒンディ村を調査した際には、やはりかつてミールに仕えていた古老により、フンザの王族・貴族の人々の功績を讃える歌が綿々と歌われた。この歌は、先のミールが1976年に没するまでは、皆に歌われていたということである。別の歌は、フンザの宿敵であるナガールを支配することに成功したハリ・タムの冒険譚を歌ったものであった。叙事詩の朗誦に近く、彼も一種の語り部の役割を担っていたと考えられるのである。

伝承方法については、まだ十分に調査されていないが、多くは、伝承者の父親もミールに所属し、古老が種々の話をミールに語って聞かせるのを耳にして育ったため、物語を覚えて自分も語るようになった、という説明をした。ロリマーの報告も併せ考えると、世襲制もしくは師弟制といった明確な伝承体制を整えた語り部の存在は、考えることが困難である。裏を返せば、そうした語り部を必要とするほどの、高度な伝承内容をもたなかったと言えるかも知れない。しかしながら、調査した語り部たちの語り口や発声は、言葉を解せぬ者をも引きつけるに足る魅力を十分にもち、語りの文化が今日もなお強く息づいていることを確信させたのである。

IV. フンザの物語のジャンルと特性

時・場所・人を特定し、それを語り手も聴き手も信仰している伝説と、それらの条件を特定しないで、虚構の世界として成立している昔話は、口承文芸を論じる場合、本来ならば区別して扱わなければならない。ところが、日本人と西欧人との間では、両者に対するとらえ方に多少のずれがあるようであり⁽¹⁰⁾、——殊に、現地語の物語を翻訳した文献は、西欧人の手になるものが多いため、この点に注意する必要がある——また、「伝説と昔話との分岐点をなす信仰と虚構との限界は決して歴史的に不変のものではない⁽¹¹⁾」ことも明白である。フンザの物語の多くは、出だしの部分もしくは終結部においては伝説的でありながら、内容は極めて昔話的であり昔話と伝説を切り離すことは容易ではない。いずれ、それぞれ別の見地から、フンザの物語群を分析しなければならないとは考えているが、今回は、総体として眺めた場合の、特に際立った特徴を、4つのジャンルに分けて論じてみたいと思う。

なお、現地で採集した第1次資料の外に、主として次にあげる文献を適宜参照し、以降は、（ ）内に記したその省略形を用いることにする。

Lorimer, D.L.R., *The Burushaski Language*, Vol 2, Oslo, 1935. (Lorimer)

Swynnerton, C., *Romantic Tales from the Panjab*, Westminster, 1903. (RTP⁽¹²⁾)

Swynnerton, C., *Folk Tales from the Upper Indus*, 年代不詳. (FTUI⁽¹³⁾)

Komal, L., *Folk Tales of Pakistan*, New Delhi, 1976.(FTP)

Chaudhury, B.R., *Folk Tales of Kashmir*, New Delhi, 1969. (FTK⁽¹⁴⁾)

Zeitlin, Ida, *Gessar Khan : A Legend of Tibet*, New Delhi, 1978 (Gessar⁽¹⁵⁾)

1. 英雄伝説のバリエーション

—— チベットとのつながり ——

まずはじめに、調査隊が現地で採集した、「バクタ・バイリスとマシュキル・カマル」を主人公とする物語の概要を記しておく。語り手は、タトノという渾名をもつ64才の男で、ミールの警備にあたるかたわら、農業に従事し、ミールの館に客がある時には呼び出されて、話を語り聴かせるのだと言う。父親も語り部で、レバートリィは20種位ということであった。ジェスチャーが極めて豊かで、発声に特徴があり、コミカルな風貌と仕種は、ミールのクラウン（道化師）ではないかと思わせたほどである。

貧しい農夫がバクタ・バイリスという名の羊を飼っていた。この羊は毎日3頭もの仔羊を生むのだが、おろかな妻は自分のために羊を屠ってくれと夫に頼む。それを聞いた猫が羊に教え、羊は逃げ出して、森でせっせと仔羊を生んだ。その内に、人間の子供が欲くなり、神に祈願した。そして授けたのが、英雄マシュキル・カマルである。

15才に成長した時、他の村に、ヌー・ガルダーンというつわものがあると聞き、彼と闘って倒し、自分の家来とした。次に、ジャンナー・ガルダーンという強者にも勝って、家来にした。ホーク・ガルダーンも倒して家来にした。ここに至ってマシュキル・カマルは、某国の王女に求婚したのであるが、条件を出された。毎年人身御供の乙女と羊を要求してくる怪物を退治することである。マシュキルは3人のつわものと一緒に怪物を倒し、めでたく王女と結婚することができた。

全体で20分ほどの比較的短い物語であるが、ここには、多くの英雄伝説に共通して伴う3つのモチーフが、シンプルな形態ではあるが、明瞭に示されている。①異常な誕生、②姫と結婚するために、困難な条件を克服すること、③そのための、3種類の助けとなるもの（ここでは3人の強者であり、通常は魔法の力をもった物や動物など）の存在、以上の3つである。

Lorimer には、もう少し複雑な構成をもった英雄伝説がある。*Kiser*（発音は不明）という名の男の冒険譚であり、その注釈によれば、*Kiser* は単に地方的な英雄であるばかりでなく、*Kiesr* の名でチベットにおいて、*Gessar Khan* の名でモンゴル一帯において、人々に知れわたった主人公であるとされている。本稿の註（15）で示したように、*Gessar Khan*の物語は、既に1804年にドイツにおいて報告されていた。*Lorimer* による*Kiser* の冒険譚には、実は種々の話型の交錯がみられ、簡単に分析はしかねるのであるが、内容をしぼり、重要かつ必要と思われるモチーフのみを、次に記しておく。

ある金持が、小麦の中から子供を発見。子供は成人して結婚し、その妻が、身体は人間で頭はロバの子や、犬の頭をもった子など100人の子供を生んだ。ロバ頭の男の妻は、ひ弱な息子バーングチュと強健な息子ブームリーフタンの双子を生む。犬頭の男は、100人兄弟を集めて土地の分配を行ない、その際、バーングチュを差別した。しかし、バーングチュの智恵で、分配はやり直しされた。更に彼は、王女ランカ・ブルーモのお気に入りとなり、結婚に至る。

王様が娘婿たちに命じた、神秘の獣ブルングカブルドーン狩りにも、バーングチュは勝利を得る。ところで妃ランカ・ブルーモは、夫のバーキングチュが普段は醜い姿をしているが、実はそれは偽の皮であり、本当は美しい王子*Kiser*であることを発見する。

Kiser は隣国ハイハイユールへ行き、その支配者たちを追い払い君主となった。ここで新しい妻、ブーブリ・ガスを得たが、残して来た妻がホルユールの国王にさらわれたと聞き旅立つ。100人兄弟の雄者たちが、次々とホルユール国王に闘いを挑むが敗退（このあたりは、インドの『マハーバーラタ』に登場する、100人王子とバラタ兄弟との戦闘場面の表現を想起させる）。Kiser はホルユールに着くと鍛冶屋に住み込み、その娘と結婚し、種々の奇蹟をみせながら、妻を取り返す機会をねらう。ついに奪還に成功。ランガ・ブルーモを第1王妃の座につけ、自分も名君として人々に君臨した。
(Lorimer No.IV)

以上の物語を更に要約すれば、次のように述べることができよう。——異常な誕生をした英雄Kiserが、真に英雄としての資格を備え、ランガ・ブルーモ姫を王妃とするまでには、神秘的獣狩、隣国の征服、そして最大の試練である姫の奪還という3つの困難を乗り越えなければならなかった。上記の文には省略してあるが、それぞれの試練克服までには、常に3つの品や機会や人に助けられている。3という数字が、こうした口承の物語において一般に重要な意味をもつことは、衆知のことである。次に Kiser の物語の源泉とされる *Gessar* についても、簡単に触れておく必要があるだろう。

ゲサルは、チベットにはびこる悪を根絶するために、ブッダを頂くパンテオンの父により、この世に人の子として生を受けた。15才までは、ヨロという名で呼ばれる醜い男であるが、①強者との闘い、②馬の早乗り、③霊獣狩りに成功して美麗なるログモ姫を妻として獲得、ここに至って、高貴な姿をしたゲサル・ハーンが真の姿を現わす。

①皇帝の狂心から国内の乱れた中国へ赴き、3つの秘力で平定し、②第2夫人をさらった巨人を倒し、③留守の間に最愛の第1夫人ログモを奪ったシライゴル国の3兄弟を長い戦闘の末に滅亡さす。そして、これらの災いの全てのきっかけをつくった悪大臣に制裁を加えて、ようやくチベットを平和な国にすることができた。因みに最悪の状態に陥る度に、彼を助けるのは、神々の国で彼を見守る、彼の3姉妹であった。

Gessar と *Lorimer* の英雄物語の類似は、もう明白であろう。そして、調査隊が採集した羊の子の英雄伝説も簡略化されてはいるが、これらの英雄物語の流れを汲むものであることも、明白になったと思われる。勿論、これらの物語に用いられている数々のモチーフは、決してここだけに限定されているわけではない。本章においては、フンザの南東の地域、即ちインダス川を溯上した地域との結びつきを、フンザの伝承の中に発見したわけであるが、次に、フンザの南西、即ちインダス川を下り、より洗練された文化と物語群をもつ地域との関連の有無を調べてみたい。冒険譚を構成するモチーフが、先とは異なったコンテクストの中で別の趣きを添えていることが理解されよう。

2. 賢 夫 人 物 語

—— 物語の中の女性を示すたくましさ ——

調査隊が採集した物語の実例を最初にあげておきたい。語り手は、40から45才位（自分の年令を正確に言える者は少ない）の農夫で、18才頃までは父親と一緒にミールに仕え、そこで老人たちによって語られる種々の物語を耳にし、覚えたと言う。「バーゲ・ホル」という名の馬鹿王子の話は、人々に非常によく知られているらしく、調査中に集まって来た若者たちも、次の言葉を既に予期している態度を見せた。先にあげた語り手ほどは、語ることを専門としている様子ではなかったが、40分余にわたってよどみなく語り続けた。語り口としては、深刻さよりも、滑稽さがまぎった物語である。

自分も結婚したいと言い出した馬鹿王子に、王様は条件を出した。羊を一頭連れて行き、その同じ羊と一緒に別の物を持って帰れと言う。ワジール(大臣)の息子のアドバイスで、ある宝石商の賢い娘の智恵を借りる。即ち、羊の毛を売って瓜を買ったのである。王子は結婚相手にその娘を選んだ。ところが身分が違うため、王様は、毎朝妻をなぐること、という条件で結婚を許可した。賢い妻は、1週間だけまって、1ヶ月だけ待って……と次々に延期させ、ついに子供をみごもったため、条件は反故同然となった。

王子は妻の賢さに嫌気がさし、妖精の姫に惚れて家出した。ところが妖精の国では巨人王に身ぐるみはがれて、奴隷にされてしまった。彼は妻に手紙を書いて実情を知らせた。賢夫人の活躍が始まる。

彼女は3人の兄弟を連れ、男装して出発。道中、持ち前の智恵で、盲と聾と跛の巨人を家来にし、巨人王の城へ乗り込んで姫を嫁にくれと申し込む。王を倒すという第1条件は、3人の兄弟によって果たされた。次に、ものを言わない姫に、3言しゃべらせるという第2条件も、家来にした巨人たちが、それぞれ、ドアの下板やテーブルの脚や、ベッドの脚になって賢夫人の言葉に対して返答し、つられて姫もしゃべってしまい、満足する。夫の王子も捜し出され、姫と結婚さすことにも成功した。彼は妻に感謝し、末長く彼女を大切に扱ったという。

ここでは、他の地域の同類の物語と比較する上で重要なモチーフを二つあげることができる。①身分違いの妻を毎朝なぐるという結婚条件と、賢い妻がその実行を延期さすこと、②家を出た夫の身にふりかかった災難を、妻の勇気と智恵で克服することである。この二つのモチーフを主要な構成要素とした物語は、*Lorimer* の中には一つもないが、*FTUI* に二つ見い出すことができる。中でもフンザのものに酷似しているのは、「グール王子」の物語である。

猟にしか関心のないグール王子を嘲笑した鍛冶屋の娘と結婚した王子は、毎朝彼女をなぐろうとする。ところが毎朝うまく逃げられ、悔しければ王家の娘と結婚してごらん、と言われて、家を出る。しかし、隣国の王女の結婚条件であるチェスの試合に挑戦して完敗し、馬屋番にされてしまう。それを知った妻は男装して王女とのチェスの試合に臨み、かつて助けたネズミの魔術などを借りて勝利をおさめ、王女を夫に、妻として与えた。

もう一つは、一種の枠物語の中で語られているエピソードである。

女性不信の男が仕方なく結婚して、相手を毎朝なぐろうとするが、夫人は賢明で、条件を出しては、その場をのがれる。ついには、男が自分で稼げるようになったら、と言われる。(それまで妻の資産で生活していた。)男は家を出るが、何をやっても失敗、最後に王様の召使いとなる。王様はその賢夫人に会いたくて、種々の手練手管を使うが効き目がない。夫自らの迎えによりやく応じた妻は、王様にふりかかった難問を解決して感謝される。

妻が男装して夫の窮地を救うなどの活躍をする話は、*FTP* にも二つあり、聡明な女性がテーマとなっている物語も、他に2・3ある。(いずれも、*Lorimer* には見い出せない。)これらの物語は、実は、女たちの賢さや勇敢さをテーマとするのではなく、むしろ、だらしのない男をテーマとしているのかも知れない。現段階ではどちらとも決め難いが、夫が、新妻を毎朝なぐるという結婚条件や、窮地に陥った夫を救出するだけでなく、夫の欲する女性を手に入れてやろうという妻の行為は、なんらかの社会状況を反映するものと思われる。更に深く広く物語を収集することによって、そのモチーフの起源なり真意が、解明されうるであろう。

なお、フンザの「バーゲ・ホル」の物語の中には、先にあげた二つの主要モチーフによる話型の他に、もう一つの特徴的な話型が含まれているので、簡単に触れておきたい。*Lorimer* が、フンザに隣接するヤシン地区の伝承として伝えている物語と同一の話型である。

ものをしゃべろうとしない姫に手を焼いた王様は、姫をしゃべらせた者に、姫を妻として与える、という布令を出した。幾人もの王子が失敗して首をはねられた。そこへ、言葉を話す猿を連れた王子が到着。姫の寝室の扉に猿を隠れさせ、シーツに付着した頭髪を材木と感じた長兄と、羊の側で育ったヤギの肉から羊の乳の臭気を感じた次兄と、服の縫針の跡を刺と感じた末子の3兄弟の中で誰が一番敏感か、と尋ねかけ、「扉」が末子と答えると、姫が長子だと反論した……。

(Lorimer Yasin No. II)

フンザの口承と称せられる短い抒情歌の中には、峠を越えはるかモンゴルの地にまで人足として出かせぎに行った夫が死んで帰って来たのを嘆く妻の歌、戦闘に出かけなければならない恋人や息子の身を案じる女の歌が多数ある。フンザの南のバルチスタンでは、バルチスタンのジャンヌ・ダルクと思われる女性を題材にした歌が愛唱されていた。カシミールとの戦いに敗れ、人質となった人妻のマルヤムが、男たちにしっかりせよと檄を投げかけ、カシミールの役人の心を動かした、という内容のものである。いずれの例をとっても、たくましくならざるをえない女たちの生活環境がにじみ出ている歌である。民衆の間での、男(夫)もしくは女(妻)に対する考え方が、どのように伝承の中に反映されているかは、単に文学的側面からだけでなく、文化人類学的にも極めて興味深い視点である。歴史的・社会的変遷を照応しながら、緻密な分析を続けてゆくだけの価値が十分ある問題であろう。

3. ロマン스와冒険

——妖精伝説を支えるもの——

フンザの物語の中には、しばしば超自然的な存在が現われる。ブルジャスキー語で *pfüt* と呼ばれ、インドのデーヴァに相当する超能力者(主として善神)、中世ヘルシア語源の *pari* (ヘリ、フリ、ハリ)と称せられる精霊もしくは妖精、そして *bilas* という人食い怪物——どうも女性の妖精らしく、追い詰められると大きな石の中に入り込む習性をもつようである——などが、それらに相当する。中でもヘリは、今日もなお人々の意識の中で、かなり現実的な意味をもっているらしく、アラブのジンと同様、人間にとっては空おそろしい存在であるかと思えば、男たちがあこがれて追い求める美しい女性でもある。前者のヘリについては後で触れるとして、ここでは、後者の場合である代表的なフンザの妖精探求物語を、調査隊の採集記録の中から一つ取り出してみたい。語り手は、「英雄伝説」の章で紹介した男と同一人物である。

イスラーム・ハデジャ王に3人兄弟の王子がいて、末のシャイ・ブルックが一番冒険好きだった。王は3人に矢を射らせ、矢の落ちた家の娘と結婚させようとした。上の2王子は辛いワジール家の娘と結婚できたが、ブルックの矢は飛んで行ったまま行方がわからない。彼は矢を捜し求めて旅に出た。そして森の中で、老婆の薪の中に矢が混っているのを発見。老婆から矢の落ちていた場所(山)を教えてもらう。山の前で2週間待った。すると山が割れて女が現れ、彼を妖精の国へと誘う。そこで、妖精の王女と結婚したいという意志を、その王女の侍女に漏らすと、それならば、王女がどのような姿に変身して現われようと驚かないで笑ってやりなさい、という智慧を授けられる。その甲斐あって、王女は彼と結婚する気になりハンカチを贈った。ところが王子は、そのハンカチの縫い取りが王女の手によるものではないからと言って受け取らないため、王女はどこかへ姿を消してしまった。

王女を捜し求めて、次の冒険の旅が始まる。途中で空飛ぶ絨氈を入手、次いで、何でも縛ってしまう綱を入手して、それで巨人の足の刺を抜いてやり、お礼に、姿を消す帽子をもらって、妖精の国への道順も教わる。行ってみると、

王女は意気消沈の態で座っている。帽子をぬいで姿を現わし、2人は再会を喜び合った。

妖精の王女が姿を消してからが、本当の意味での妖精探求の冒険譚となる。それまでは、むしろ、男が結婚するための一種の通過儀礼と考えることができよう。この冒険においても、やはり3種の魔法の力が必要とされる。同様のタイプの話が *Lorimer* の中にも見られる。

デーヴァの1人 White Deu は、シャーザーダ・パーラム王の人柄に惚れ、自分の息子として館に住ませた。彼の留守中、王は禁断の園に入り、パーヌという妖精に出会い、結婚する。祖国の危機を夢に見て、パーヌを連れ帰国し、敵を倒したが、その間にパーヌはどこかへさらわれてしまう。王位を養父に譲り、パーヌ捜しの旅に出る。デーヴァからももらった魔法の杖、帽子、サンダルの力をかりて、パーヌをさらった相手を倒し、パーヌの両親と共に幸せに暮した。
(*Lorimer* No. I)

妖精を妻とする話は、先の「賢夫人」の章でも、一つのモチーフとなっていた。ちなみに、妖精又は妖精の国を捜し求める話は、フンザ以外の地域の物語の文献からは、筆者が調べた限りでは一つも見つかっていない。妖精探求の冒険といっても、「英雄物語」の章で扱った、さらわれた妻を追ひ悪者を退治するというモチーフの内容と、具体的には大差がない。妖精の国が視覚的に描写されているわけではなく、妖精の女が人間の美女と異なっているという表現もない。したがってここでは、妖精という観念そのものに意味があると考えることができよう。カラコルムの山奥ふところにいたかれたフンザにふさわしいモチーフ、と言ってしまうえば簡単であるが、妖精にあたる言葉「ヘリ」が、ヘルシア系の言葉であって、フンザの固有の言葉でない点に、種々の憶測を許す問題が残る。周辺地域で、類以の観念もしくはモチーフがあるかどうかを、今後調査する必要がある。

ところで、既に述べたように、妖精探求も一種の、失われた妻捜しである。フンザにおいては（チベットの英雄伝説 *Gessar* の場合も）、いずれの妻も無事救出されて、あっけなくハッピーエンドとなる。妻がさらわれていた間の貞操の問題には一切触れていない。妻奪還の物語として最も有名なものの一つは、インドの叙事詩『ラーマヤナ』であり、ラーマが奪われたシータ姫を取り返す冒険物語と言い換えることも可能である。ところが結末においては諸説あり、貞操の問題から、必ずしもハッピーエンドの話ばかりではないのが現実である。*FTP* には、「ウマール王とマルイ」という有名な話があって、許婚者がありながらウマール王にさらわれたマルイは、無事帰郷して、婚約者の前で焼けた鉄棒を握り、身の潔白を証明する。シータ姫も、いずれの物語においても一旦は燃えさかる火の中に身を投げ、証^{あかし}を立てている。いわゆる恋物語においては、恋人同志もしくは夫と妻が一旦離ればなれになった場合、一般に2人の死をもって物語が終る場合が多いのではなからうか。少なくとも、イスラム文化圏、ヒンズー文化圏においては、そうした例をいくつか想起することができる。夫と離れている間の妻の貞操をどのように扱うか、あるいは問題にするかしないかについて、グローバルに論じるだけの資料を集めてはいないが、民族性・宗教性、あるいは物語のジャンル区分の仕方と絡み、多様なケースを考えることができる。今後の大きな課題の一つと言えよう。

4. 習俗とトライブに関する説話

—— ギルギットとのつながり ——

フンザで主流を占める宗教は、イスラムの一派であり、アガー・ハーンを頂くイスマイール派である。フンザがイスラムに改宗したのは3世紀前であるという説があるが⁽¹⁶⁾、明確にはされていない。宗派の性格から、戒律も比較的ゆるやかで、女性の地位も、他のイスラムの世界よりは高いとされている。宗教的行事も、アガー・ハーンの誕生日と、イード（断食明け）の祭り以外には大きなものはないということであったが、3月21日のノウ・ルーズ（新年）の祝いはさておき、恐らくイスラム改宗以前から続いていると思われる祭りが、ここでは重視されている。大麦の収穫を祝い、実りの具合に応じて6月25日前後にとり行なうギナニと、ギルギットを支配した伝説的人物にちなむ、12月21日のトゥムシャリングの行事がそれである。後者については、ギルギットのフォークロアとして種々のバリエーションをもった話が伝えられているが、その一つを紹介しておこう。

かつてギルギットは、妖怪の出身であるシュリバダット王に支配されていた。彼は幼児のスーフを毎晩要求して人々を困らせていた。ついに妖精の3兄弟が現われ、兄2人は弟のシェムシャルに妖精の掟を破らせて人間に変え、ギルギット平定の願いを託す。

シェムシャルは森で出会ったシュリバダット王の娘と愛し合うようになり、自分の素性と目的を明らかにして彼女を妻にする。そして父親から、その魂のありかの秘密を聞き出させる。王は娘のハンガーストライキに強迫されて白状した。魂は雪の中にあり、火によって滅びるといふ。

シェムシャルは、彼を慕う農民たちを集め、1足で1マイル走るという王の馬のために落とし穴を掘らせてから、大きな松明を持って砦の周囲を囲ませた。熱さに耐えきれず馬に乗って飛び出した王は、落とし穴に落ちて果てた。

2人の婚礼が人々によって祝われ、幼児に代って羊が捧げられた。以後、冬の始まる前月の初めて新月が出る晩、人々は松明をかかげて、火の祭りを行なう⁽¹⁷⁾。（以下に続く行事については省略）

調査隊の情報提供者は、12月21日に行なうと言ったが、J. クラークの25年前の記録では12月18日となっている⁽¹⁸⁾。いずれにしても、西暦によるこの月日は、民俗学的に考えれば、冬至の祝いとの関連を当然指摘することができるが、ここではこれ以上立ち入らないでおきたい。なお、上記の引用は、ライターにより、19世紀後半に記録されたものであるが、20世紀初頭に書かれた G. ムハムマッドの記録や⁽¹⁹⁾、現在のパキスタン政府の刊行物では⁽²⁰⁾、ギルギットを救ったのは妖精の3兄弟ではなく、仏教徒の王を征服するためにバルチスタンのスカルトゥからやって来た、最初のムスリムの3兄弟（名前は同じ）であるとされている。それに関連して、ギルギット周辺地区（フンザ等を含む）がムスリム化され、スカルトゥの支配下になってきたと語る説話も存在している。大宗教の前に、それ以前から信じられてきた超自然の存在が次々と改変させられてきた例は世界中に多々あるが、このギルギットの物語もその一例になるであろう。

同様にギルギットとの関連が強く感じられる、もう一つのフンザの習俗を扱ってみたい。但し、この行事が今日も行なわれているか否かについては未調査である。Lorimer の中から特に必要とされる部分のみを抜き書きしておく（引用する物語の主題は、このモチーフではない）。

フンザでは昔から、Dalv の月の15日に、Bopfau の行事を行なってきた。アレキサンダー大王の時代から存在すると言われる大きな鉢があり、人々はこの日、ディラミティン族の主導的な人物に鉢をバルティート村からアルティート村に運ばせた。そして、(その鉢に入れて?)、Bopfau にミールの館からばらまかせる種子を運ばせ、そのあと、マムーツァの畑まで連れて来た。(Lorimer No.XIII)

この話の不鮮明な部分を補充するかのごとき話が、ギルギットに伝わっている。

昔ギルギットに、大層裕福なカチャタ族がいた。それに目を光らせたラー族は、カチャタ族に夜襲をかけ皆殺しにした。その時、1人の妊婦だけが秘かに逃げのびた。その後、ラー族が小麦の種をまくと全部苗が黒枯れしてしまうので、ダーヤル(一種のシャーマン)を呼び原因を占わせた。その結果、カチャタ族の末裔に種をまかせれば、大地は甦えると言う。先の妊婦が生んだ息子が発見され、予言通り、豊かな実りが得られた。それ以後、ラー族の土地はまづカチャタの者が耕作し、種をまく時は、ラー族が盛大な饗宴を催し、一握りの種をカチャタがラーの前掛けに投げると、ラーはそれに金を混ぜ、畑にまいた。残りの種を他の人々が自分の畑にまいた⁽²¹⁾。

ここに出てくる「盛大な饗宴」の中で、日本の田楽の行事にみられる「田遊び」に酷似した戯れ事が行なわれる様子が書かれており、興味深いと思われるので、付記しておく。また、カチャタ族の唯一の末裔となった男は、「結婚して4人の息子を得、その内の3人が、フンザ、ナガール、ヤシンへ行った」とあり、そこから Lorimer の話に連続する可能性が考えられる。

敵や敵の後継者になりうる者を皆殺しにするという話は、新・旧約聖書の世界を例に出すまでもなく、遍在している。Lorimer から3例を見い出すことができた。その1例には、皆殺しの後、穀物が実らないという、上記と同一のモチーフが用いられている。

元来、バルティートにはタフキエント族が、アルティートにはウセングート族が、ガニッシュにはハマチャティンク族がいた。ハサナバードの奥の峡谷には今のような氷河はなく、タフキエント族がいた。これがあまり威張るので、マイユール・タムという人物が出て、タフキエント族の男と懐妊中の女を皆殺しにして、自分が長になった。するとフンザに飢餓がおとずれ、トウモロコシをまくと真黒になった。ピタン(一種のシャーマン)に占わせると、タフキエント族の末裔に種をまかせると良いと言う。皆殺しの日、1人の女が出産のため実家に帰っていて、その後男の子が生れていることがわかった。彼に種をまかせて飢餓は去った。(Lorimer No.XXII)

以上3つの話を照し合わせて、ようやくフンザの行事 Bopfau の性格の概要が把握できたのではないと思われる。山岳の民らしく、トライブやクランの数が多く、互いに対立・交戦状態にあって、そこから生れた悲劇や教訓はいつまでも語り継がれてきたのであろう。Lorimer No. XXII の出だしの部分と同じように、幾つもの地名や部族の名称を連らねて一種の起源説話をなしているものが、Lorimer の中だけで6話ある。既に前に述べたが、ロアー・フンザのセンディ村で採集した、フンザの王族や貴族の手柄を歌いつづった歌詞の中には、調査隊のインフォーマントであるバイズの曾祖父の名もあった。バイズもワジール(貴族)の一員である。

フンザの習俗の一つとして重要な位置を占めるものに、上の例話にも登場したピタン(ギルギットでは、シーナ語でダーヤル)の存在がある。彼等は、幼年や青年時代に妖精ハリのビジョンを見たか、もしくは声を聞いた者とされている。親子代々の場合も、そうでない場合もある。現在、フンザ全体で2~3人いる模様で、その内の2人を調査隊は取材することができた。彼等のトランス状態での

予言には、常に笛と太鼓の楽人の存在が必須条件である。従って、民族音楽的・文化人類学的にも極めて貴重な資料を提供するものであるため、調査の様相および結果の詳細な分析・論究は、別の機会もしくはその分野の専門の調査隊員の報告を待つことにしたい。物語についてのみ言えば、そこに登場するビタンは、ビタン同志で占いの勝負をしたり、呪術で怪物を退治したり、妖怪ビラース(前出)などを石の中へ封じ込めたり活躍をする。

なお、*Lorimer* は、石や泉の出現の由来、塩の流通に関する由来、泉や牧草地の利用に関するとりきめの起り、等々、人々の身近な生活の中から多様なテーマを話の題材として取りあげており、フンザの豊かな口承文芸を証明していると言える。

V. お わ り に

今後に残された課題は、各々の章でそのつど示してきたが、現在手元にある資料全体を眺めた場合、なおも問題として残ることがらを整理しておきたい。

参照資料として最初にあげた6種の文献の中で、*Lorimer* と *Gessar* を除く4種の文献(146の物語を含む)を話型やモチーフ別に統計を取ってみると、数が多いのにもかかわらず、フンザの資料の中には見あたらないもののほんの一例として、次の項目をあげることができる。

- ☆両者の死で終る悲恋物語(「ライラーとマジュヌーン」型)
- ☆継母による王子いじめの物語(「シンデレラ姫」型、つまり王女がいじめられる例はない)
- ☆王様と盗賊の人格者の物語(王様が平民に身をやつすモチーフを伴うことが多い)
- ☆子供などを箱に入れて川に流すモチーフ
- ☆ビールやファキール(共に修業僧)により、殺された者が生還するモチーフ
- ☆美女の絵姿や噂に惚れてその女性を捜し求めるモチーフ

フンザの第1次資料がまだ十分でない現在、軽率な判断は慎まなければならないが、筆者が殊に注目したいのは、フンザにおける悲恋物語の欠落である。調査隊の質問に答えて語り手たちも、「恋物語も語るが、それは主としてベルシアやアラブの物語である」と言っていた。しかも比較的近年になってからのレパートリィであることは、*Lorimer* の物語群を見れば明らかである。上にあげた項目は、大体において、文明の進んだ上流社会を背景とした物語に付随するものであり、庶民の感覚や山岳民のシンプルな精神には無縁のテーマかもしれない。現実に調査隊が聴いた物語には、深刻なテーマとコミカルなテーマが常に混在しており、高度な文字文化・文学の伝統を背景にもった地域の物語群とは、やはり性格を異にすると言わざるをえないであろう。語りを職業とする専門の語り部が存在しなかったことも、別の要因となってフンザの伝承文化を特徴づけていることも考えられる。他の世界との交渉の少ない小世界の、しかもミールを中心とした小コミュニティの中で、人々が相互にはぐくんできた物語は、民間口承文芸の自然な形態を呈示していると、とらえることもできよう。

話型、モチーフという表現を借りて、フンザの口承文芸の概略にアプローチしてきたわけであるが、実は話型^{タイプ}およびモチーフの概念を昔話研究に導入した、A. フェールネの「昔話類型索引」やトムソンによるその修正資料⁽²²⁾、ならびに、同じくトムソンによるその極めて精緻なモチーフの

索引⁽²³⁾とは、まだ綿密には照合していない。それには、彼等の基礎資料の中に、アジアのものがほとんど入っていないからという理由も手伝っている。だからこそこえって、今回の研究ノートに記した特徴的話型やモチーフを彼等の索引の中に捜し、有無を明確にすることは、フンザおよび北インド・パキスタンの *folktale* の最も広範な意味での比較研究になることは確実である。そこから、フンザのみの固有性を見い出すに至るには、やはり長い道程を必要とするであろう。フンザ人はしばしば、「彼はパキスタン人だから……」とか、「これはパキスタンのものだから……」という表現をして、フンザを狭義のパキスタンから厳然と区別する。これまでみてきたように、フンザの物語内容は、必ずしも他から孤立したものではない。しかし、何がどこまで受容されているかは、大いに問題としなければならない。しかも過去半世紀の間にも、受容の仕方は大きく変遷したことが、*Lorimer* の記録と調査隊の記録を比較しただけでも明白となる。その上、今後は、語り部の存在の意義自体が問われるような時代が訪れるであろう。

しかしながらフンザに関しては、依拠して信頼に足る、歴史的・民族学的研究がまだ現れていない。現在、*folktale* の *folk* の過去に関しては、残念ながら正確な知識をもつことができない。従って逆に、フンザおよびその周辺地域の口承文芸の総体的な分析比較が、民族的体験や文化的変遷のいくつかを側面から立証し、暗示を与えてくれるかも知れない。少なくとも、人々がとらえた社会や生活や歴史の心情的現実が、伝承の中に投影されて浮かび上ってくるものと思われる。今回の調査隊は、民族音楽、文化人類学、美術、および筆者の担当する文学の研究者たちによって構成されたものである。それぞれの分野での整理分析が進んだ段階で、更に広範な事実の集積を得て、本稿を次回に継続させてゆきたい。

(1981年4月)

(註)

- (1) Hassnain, F. M., *Gilgit—The Northern Gate of India*, Sterlig, New Delhi, 1978.
- (2) Toynbee, A. J., (安田章一郎訳)『歴史紀行 トインビー著作集 7』社会思想社, 1976年, 504頁。
- (3) Leitner, G.W., *Dardistan in 1866, 1866 and 1893*, Oriental University Institute, England, 1893, P. 173.
- (4) Hassnain, F. M., op. cit., pp. 38-39.
- (5) O'Leary, J., *Burusho Cultural Summary*, Unpublished Manuscript, New Haven : Human Relations Area Files, 1965, p. 1. (HRAF files)
- (6) Clark, J., *Hunza—Lost Kingdom of the Himalayas*, Funk and Wagnalls Co., New York, 1956, pp. 202-14.
- (7) Lorimer, David L. R., *The Burushaski Language*, 3 vols (Vol 1 : *Introduction and Grammar*, Vol 2 : *Text and Translation*, Vol 3 : *Vocabularies and Index*), Instituttet for Sammenlignende Kulturforskning, Serie B : Skrifter, XXIX, 1-3, Oslo, 1935, 1935 and 1938.
- (8) Lorimer, *ibid.*, Vol 2, p. VI.
Lorimer, Emily O. (wife of D. Lorimer), *Language Hunting in the Karakoram*, London? 1939, p. 213.
- (9) Lorimer, D. L. R., op. cit., Vol 2, p. VI.
- (10) 小沢俊夫『世界の民話』中公新書, 1979年, 11—12頁。
- (11) 関敬吾「昔話の社会性」『関敬吾著作集1』同朋社, 1980年, 7頁。
- (12) 使用したテキストは, *Romantic Tales from the Panjab, collected and edited from original sources by the Rev. Charles Swynnerton, F. S. A.* (Senior Chaplain to the Indian Government, ret'd.), A Qausain Goldmohur Reprint, Lahore, 1976. 23の物語を伝えている。
- (13) 使用したテキストは, *Folk Tales from the Upper Indus, with numerous illustrations by native hands, by the Rev.*

- Charles Swynnerton, F. S. A.* (founded among the collection of Major General Shahid Hamid) , A Reprint of National Institute of Folk Heritage, Islamabad, 1978. 85の物語を伝えている。
- (14) *Folk Tales of Pakistan* および *Folk Tales of Kashmir* は共に New Delhi の Sterling Publishers によるもので、'Folk Tales of the World' および 'Folk Tales of India' (21 vols) のシリーズに含まれる。前者は15, 後者は23の物語を伝えている。
- (15) Ida Zeitlin が依拠したオリジナルは, *Die Thaten Bogda Gesser Chans*, published in St. Petersburg in 1839 であり, その翻訳に際しては, カルムイク語 (西モンゴルに住むカルムイク族の言語) の原典を訳して, *Nomadische Streifereien* , Vol 3, published in Riga (1804) に公表された解説を参照している。
- (16) O'Leary, T. J. *Burusho Cultural Summary*, Unpublished Manuscript, New Haven : Hunza Relation Area Files, 1965, p. 11. (HRAF files)
- (17) Leitner, G. W. "Historical Legend of the Origin of Gilgit," *Dardistan in 1866, 1886 and 1893*, Oriental University Institute, England, 1893, pp. 9-15.
- (18) Clark, J. *Hunza...Lost Kingdom of the Himalayas*, Funks and Wagnalls Co., New York, 1956, pp. 174-77.
- (19) Muhammad, G. "Festivals and Folklore of Gilgit," *Memoirs of Asiatic Society of Bengal*, Vol 1, Calcutta, 1907, pp. 114-19.
- (20) 上記の部分的リプリントであり, National Institute of Folk Heritage, Islamabad (1980) から出版されている。41-49頁。
- (21) Muhammad, G. op. cit., pp. 119-20.
- (22) Aarne, A. *Verzeichnis der Märchentypen*, Helsinki, 1910.
Thompson, S. *The Types of the Folktale : A Classification and Bibliography*, Antti Aarne's *Verzeichnis der Märchentypen*, Helsinki, 1927.
- (23) Thompson, S. *Motif-Index of Folk-Literature*, Copenhagen, 1955-58, Vol 1-6. (Revised edition by Indiana U. P., 1975)